山本尚志　『マシーン』

これは書の作品である。最終的には「文字」を書くのであるが、その意味を込めて書くには、きっかけが必要であり、周りの図形（物体らしきもの）がそれである。私はマシーンの図形を予め描き、それを認めた上で「マシーン」と書いている。
先の「マシーン」シリーズは年を中心に書いたものだが、今回の再制作にあたっては、かつての「マシーンエイジ」という工業製品的ニュアンスから、パソコンの電子部品、あるいはネットワークを示す「腕のようなもの」が作品の要素として外せなくなり、そのように変化したと考えている。
「マシーン」、すなわち電子デバイスを含む一連の「装置」が、我々の世界にはひしめいている。巨大な工業工作機械のこともあれば、平面的なマイクロチップのこともある。それは、人間世界、あるいはその世界観が 3 次元から 2 次元へと、そんなふうに、現実世界がバーチャルな世界に移行したことを示すようでもあるのだが、忘れないでもらいたいのは、これが「書の作品」であるということだ。
つまり、元々2 次元だったものが、疑似的な 3 次元の図形を予め描き、そこに文字を入れていくことで成り立つように仕向けたこの作品は、そもそも水墨画の傍にある「画讃」にもあるように、平面である文字と絵面の立体の交差する微妙なニュアンスを含んでいた。その両者を同時に引き合わせたのが私の作品であるのだ。
そして、今の私の作品「マシーン」の以前からの変化とは、今の人間社会に生きる、そんな私の頭の中の変化そのものなのだ。（2022 年記す　山本尚志）